

前号の終わりに通化市について、「戦争に関するイメージが強く、明るい話題や名所旧跡は集安市を除くとあまりない」と書いたが、念のため友人である大連市出身の留学生の顧傑君^{こけつ}に何か明るい話題はないものか聞いてみた。

彼は通化市出身の友人がいるので聞いてみると言ってくれた。一週間後彼から電話があり、「やはり通化市内は名所旧跡はあまりないそうです。ただ、集安市と通化市の間に〈五女峰国家森林公园〉があって、そこに五女峰という美しい五つの連なった山があるそうで、その名前の由来の民話を教えてくれました。朝鮮人参とも関係があります。如何ですか?」と言う。さっそくどのような民話なのかパソコンの添付資料を読んできた。すこし長くなるが以下にあらすじを紹介したい。

▶五女峰の民話◀

『昔々、天界に七姉妹の仙女がいた。ある時人間界の自由な生活に憧れて七番目の仙女がだまって人間界に天降りした。そのことが玉皇大帝(道教でいう天帝)と西王母に知られたため天降りできなくなった。長女の仙女は何とかして人間界に行こうと一計を案じた。それは、母親の西王母の誕生パーティが毎年あるのでプレゼントを人間界で手に入れる、という策であった。長女は、「長白山(吉林省と北朝鮮との国境にある高さ2691mの山)にある千年のオタネ人参(朝鮮人参のこと)は食べると若返り、不老不死となるそうだがこれをプレゼントしたい」と母親に話をし、何とか行かせて欲しいと頼み込んだ。

母親は「今は天降りは厳禁なのでだめだ」と言ったが、そのうち若返りするという誘惑にとうとう負けて長女を呼び、「あなたが



長白山頂にある北朝鮮と中国の国境を示す石杭(手前が中国)(2008年6月の社員旅行で)。この山すそにオタネ人参の種をまいた?

たの孝行が本当なら今回だけ例外を作って人間界に行かせてもよい」と許可した。長女は大変喜んだが母親は、「ただし、七女は天の規定を破ったので許可できない。そして六女は私のそばにいること」と言うのであった。

長女はやむなく4人の妹を連れて人間界に降り立った。降り立ったけれども長白山のどのあたりにオタネ人参があるのか分からない。困っていると、ある村に高台という立派な若者がいるがその者に聞くといいと言う人がおり、その人を尋ねた。

ようやく高台に会うことができわけを話すと、彼は姉妹の心に感動し一緒に探すことになった。探すこと半月、ようやく一つ見つけることができた。もうすぐ母親の誕生日だったのでお礼を言って高台と別れ姉妹は天宮に帰り着いた。プレゼントをもらった母親はとても喜び、いつしか彼女たちへの監督は厳しくなくなっていった。

一方姉妹たちは高台のことが忘れられず、こっそりと高台の住む村のあたりに何度か天降りしたがなかなか会えないでいた。

ある時もまた河辺で夕暮れ時まで待っていたが、高台は現れなかった。長女はもうそろそろ天宮に帰ろうと言ったが、五女が「もう少し待ちましょう」と言うので皆でおしゃべりをしているといつしか天に帰ることをすっかり忘れてしまった。

すると突然雷が鳴り暴風が吹き始めたのである。天門が閉まった後、母親は娘たちがいないことに気づき天兵を遣わして娘たちを捜しに行かせた。仙女たちが高台に会いに行ったことを知ると大帝も王母も激怒した。そこでまた天兵を遣って五人の娘全員を人間に降格の上、そこで石にさせ永遠に人間界に残させた。雷も鎮まり風もやむと五人の仙女はいなくなり、かわりに河辺に五つの峰がすくっと屹立したのである。その後人々がその峰は仙女だったことを知り、五つの峰を「五女峰」と命名した。五女峰の中で最も高い峰は、長女で「天女峰」という。以下、次女が「玉女峰」、三女が「参女峰」、この三女はオタネ人参の種を高台に渡し長白山系に散布してもらった。それがためこのあたりは朝鮮人参の名産となったと言われている。四女は「秀女峰」、五女は「春女峰」となった。以降この峰々は人々に山の幸と素晴らしい景観を与えることになった』

前号で通化市の名産はワインと朝鮮人参と紹介したが、朝鮮人参に関してこのような民話があるのは、いいものである。顧傑君に感謝したい。



さて、通化市内に入ってバスから降りてすこしづらづらすることにした。建設大街という大通りを歩いていると、渾江に架かっている紅旗大橋のたもとに来た。なかなか立派な橋である。渡りきるとにぎやかな商店街になる。

あちこち歩いてみたがこれと言ったところはない。マクドナルドがあったのでそこでコー

ヒーを飲んでいると、友人が楊靖宇の記念館があるからそこに行こうというのでタクシーに乗ってそちらに向かった。友人に聞くと楊靖宇（1905年～1940年）は有名な抗日戦士だという。私は勿論知らなかったので取りあえず行って見ることにした。

記念館というのは通化市の郊外にある楊靖宇陵園という広大な公園の中にある「東北烈士記念館」のことだ。なかなかの構えで立派である。彼の遺体はここに安置されているという。東北烈士記念館という名称なので楊の故郷はこのあたりかと思っていたら、河南省出身だという。名前も本名ではなく、馬尚徳と言う名であった。彼は日本が日露戦争で勝利した年に生まれたが、もの物心ついたころから中国東北部には日本軍が地歩を固めつつあった。

1928年には瀋陽で張作霖が爆殺され、1931年には満州事変が勃発。1932年には満州国建国と、混沌とした時代に入りつつあった。国に対する危機感を持ったであろう楊は、東北に向かい反満抗日（満州国に抗し、日本の支配と戦う）の活動に没入して行った。1937年7月7日に起きた盧溝橋事件から日中戦争の戦端が開かれ、彼はいくつもの戦いの先頭に立ち日本軍に立ち向かっていくのである。そして1940年にととう日本軍との壮絶な戦いの末戦死した。

食べるものもほとんどない中でも気力を振り絞って戦った。亡くなった時は餓死寸前であったといい、射殺された彼の胃の中からは草の根



楊靖宇陵園入り口付近

や木の皮しかなかったことから、「草根木皮」^注という言葉が生まれることになったそう。そして亡くなった場所に近いこの地に、「東北抗日連合軍の創設者で指導者」との名譽ある肩書に包まれ葬られることになった。彼の死を悼んでこのあたりは「靖宇県」という名の行政区にしている。

ハルピン市で紹介した兆麟から名をとった「兆麟街」や「兆麟公園」のように（わりい188号参照下さい）。記念館に入ったが展示内容は瀋陽にある9・18記念館とあまり変わらず、どうしてここまで残虐な展示をするのだろうと悲しくなった。東北地方はこのような記念館が多いが、子供のころからこのようなものを見れば到底日本が好きになれないであろうと思うばかりであった。このような抗日記念館入り口の看板は江沢民元主席が書いたものをよく見る。

次に満州国首都の遷都および終戦の翌年、1946年2月3日に起きた「通化事件」について触れておきたい。この事件は今はその傷跡はなく資料も少ないのであまり知られていないと思う。

第二次世界大戦末期日本の敗色濃厚になった時、1945年8月9日長崎に原爆が投下されたその日に、突如ソ連は日ソ不可侵条約を一方的に破棄して満州に攻め込んできた。満州国の首都であり、溥儀の住む皇宮のあった新京（現在の長春）は放棄せざるを得ず、8月初めに通化市への遷都を決定し、合わせて関東軍司令部も再編成しこの地に移すことにした。ソ連が攻め込んだ同じ日に移り、そこに続々と各地に展開していた関東軍や開拓農民たちが集まってきた。皇帝の溥儀は少し離れた大栗子（鴨緑江沿いの村）に設けた仮の皇宮に移った。しかし、8月15日に終戦となったのはご承知のとおりである。満州国最後の首都はたったの7日間であった。

ところが終戦後今度は中国国内では、国民党と共産党の対立が激化してきた。最後の関東軍司令官で赴任してきた藤田実彦はこの混乱に乗じて一気に立ち上がり、国民党と組んで共産党の八路軍と一戦を交えようとしたのである。

最終決戦は翌年（1946年）の2月3日に決定した。しかしこの計画は筒抜けになって、決行した日にたちまち鎮圧されてしまった。その時に開拓農民や市民が巻き込まれ多くの犠牲者が出たのである。死者は2千人とも3千人とも言われるがはっきりしていないようである。戦時中はもとより、終戦となってもこのような痛ましい事件がいくつか発生したという。このようになんとか歴史に残る戦闘もあるが、歴史に残らないが大きな犠牲者の出た事件や事故を戦争は星の数ほど作るのだ。戦争は決してしてはならない。

これまで書いてきたように、通化市は戦争の印象がぬぐいきれない。現在中国人民解放軍の基地があると聞いたが、ぜひとも平和なイメージの都市となるよう期待したい。

2009年3月21日、友人と私は通化駅前に到着した。一泊二車中泊の旅は終わりに近づいている。17時14分発の寝台車（K7386）まで少し時間があるので腹ごしらえすることにした。すぐレストランが見つかり、そこで普段はほとんど口にしないビールを飲みながら、改めてどの街にも他の街には見られない歴史や特色があるものだと、そしてこのような戦争は今後一切起こしてはならないと中国人の友人と話し合った。寝台車は翌日の朝8時18分に大連駅に無事到着した。

（注）

草根木皮：まっとうな食べ物ではないたとえ。飢饉などで食糧不足に陥った時の様子で表す。また漢方薬の薬材の意味もある。